

環境大臣賞（優秀賞）

四季の味がする水

しんしんと雪が降り、雪かきにも少し疲れたとき、ふと軒先にできた水柱の、

「トントン」

という音を聞くと、だんだん春が近づいているんだと感じ、今年の水はどんな味だろうといつもわくわくしています。なぜなら、その水は、山から出てくる水だからです。周りには、川がなく、山の奥深くの地下から湧き出てくる水で、何日も日照りが続いても、一度も涸れたことがない、とても不思議な水です。

この不思議な水が飲める祖父の家では、水の味が四季折々に変化し楽しむことができます。春の水の味は、冬の雪解け水なので、さらさらとして夏の氷水のように甘く、そしてやわらかくやさしい味がします。夏の水は、とても冷たく、冷蔵庫で冷やした麦茶のように、少し葉っぱの味がします。秋の水は、どっしりとした温かみのある岩風呂の温泉の水のような味がします。冬の水は、とても温かく、ほんのり甘酒のような甘い味がします。

残雪の中、雪を少しかき分け、ふきのとうを採り、この水で洗って作った、ふきみそやふきのとうの天ぷらは、少し苦みがあるがだんだんと口の中に甘さが広がります。また、太陽の光をたくさん浴びた夏野菜の茄子や胡瓜、瓜などもこの水で冷やすと、砂糖水のような甘さが加わり、体全体においしさがしみわたります。

毎日の生活をする中で一番水がおいしく感じるのは、炊きたてのご飯を食べた時です。これがおいしいのも作るときに、不思議な水を使っているからだと思います。また、米をといでいる時に感じるのは、水の温度が一定だということです。水道水の場合、夏はぬるく、冬は冷たいと感じますが、この水は真逆で夏は冷たく、冬はあたたかいです。

この水は、冬の雪が深く関わっています。大雪が降った翌年は豊作に、暖冬だと、米粒が少し小さくなる傾向があります。私は、大変だと思

福島県 福島大学附属中学校 三年 鈴木 康源

ながら、雪かきをしています。作物を支えてくれている大切な水が変化していると思うと、だんだん雪かきも楽しくなってきました。これと同時に、雪のありがたさや大切さそして、自然のすばらしさにすごく感動してしまいます。

畑の作業にも違いがあります。水が必要な作物には、この水を使っています。特に、味が違いがあるのは、里芋です。夏にたくさん水を与えた里芋は、秋に収穫したとき、とても大きく、食べるとねばりけがあり、ほくほくしていてとてもおいしいです。

山の水がどんなところから、流れてきているのか興味があり、祖父と一緒に見に行きました。どんだん山の中に入って行くと、足元に落ちていく木々を踏み、パキパキと音がして、水の流れる音は全然聞こえませんが、さらに進んで行くと、鳥のさえずりや、時々野うさぎの足音が聞こえてきます。そしてようやく、山の奥深くに入った時、祖父が、「ここだと聞こえるかも。」

と、言われ、ゆっくり近づいて行くと、私の耳にかすかに聴こえてきました。

「きりきり、さあさあ、チンチロ。」
と、やさしくてやわらかい水の音がします。まるでハーブのきれいな音とソプラノリコーダーのドのような音に聞こえます。この水の音を聞くと、今年もおいしい米やおいしい野菜そして、おいしい水が飲めると期待で胸がいっぱいです。自然は、こんな音でも勇氣や元気をわけ与えてくれることに、私達人間は、自然の恵みに生かされているんだと感じることができた瞬間でした。

自然から与えられたこの山の水は、幸せを運んでくれます。この水が飲めるのも、先人達のたゆまぬ努力と、未来に残したいという思いやりが、水の生命力となって、私達の命を支えてくれています。大切な水を私は今と同じ状態で守り、残して行きたいと思えます。